注① 拙稿「六国史における『御』という字の動詞用法について」（同志社国文学・14）

② 土井忠生訳注『ロドリゲス日本大文典』五七〇頁

③ 『佩文韻府』に収載するものは熟語・成句雑多であり、難解なものが多いため、一々原典にあたり、その注釈書等を参考にした。ただ一々の用例を分類するにあたって、同一用例でも注釈書間で相異なる語構成に解している場合がある。この場合適宜判断したが誤りはまぬがれまい。

④ この「幸御」と(ト)の中の「幸御」は同義語並置という熟語構成は同じだが、意味においては「寵愛する」と「往来」とであり異なるものである。

⑤ 「平安時代和文における漢語を構成要素にもつ語彙について」（東洋大短大紀要）

⑥ 例えば、「遠居御所、行レ政不レ便、宜御（オハシマス）ニ近処」（書紀・後・315・3）、「天皇脱屣、御レ閑之日」（続後紀・154・1）、「擬レ還ニ五條宮一、暫御ニ大臣第一、為レ避レ忌也」（三代実録・25・1）など。

⑦ 『倭訓栞』に「たまふ　給ノ字賜ノ字などをよめり。（中略）今は貴ふ詞となれりよて、御ノ字をよめる事東鑑にもみえたり。」とあり、『同』増補語林には「たまふと云詞に三句の品あり、一には御衣をたまふ御酒をたまふなどゝ云は賜ノ字、又給ノ字、二には貴人の事をいふに、見たまふ聞きたまふ出でたまふなどゝ云は御ノ字也（下略）。」とある。

テキストとして使用したもので主なものは次のとおりである。六国史・四鏡・『百錬抄』『吾妻鏡』は新訂増補国史大系（普及版のあるものはそれを利用、『吾妻鏡』は必要に応じて寛永版本を用いた。）公家日記は大日本古記録・増補史料大成。

編集後記

玉井さんからは羽仁新五の近代文学研究についての蘊蓄を傾けた大作を、山田君からは宝永期の近松解明のために「『傾城吉岡染』の方法」の考察を、そして向井さんからは『曽根崎心中』の「観音めぐり」の復活を喜ぶ視点が寄せられた。浅野君は漢語の浸透を述語の文法的性格によって解明し、蜂矢君は形容詞の成長を重複と母音交替とから考え、吉野君は和漢の混淆を敬語接尾辞「御」の成立・展開を通して扱った。論文はそれぞれに野心作であることを喜び、編集子に代って急に執筆した事情を付記して筆をおく。

（松下貞三）